

## 沖縄県下の魚病発生状況

島袋新功

はじめに

県下においても、養殖業についての関心が急速に高まり、現在ウナギ、エビ類、コイ、ソウレンギョ、スッポン、ヒトエグサなどが養殖されている。今後も、規模の増大、対象魚種の増加が予測される。

いずれの養殖池においても着業早々であるにもかかわらず、魚病の発生が少なからず見られた。このことは、養殖業の健全な発展の為には、魚病対策が十分なされなければならないことを示している。

筆者は、各養殖池における魚病の発生状況を調査したので、その概要を報告する。但し、これは主に琉球水産試験場への調査依頼があった範囲内であり、実際には、魚病の種類、発生池及び被害もこの報告書以上に出たものと予想される。

### 調査結果

今回の調査報告は、1970年の5月～10月の間で、各魚別の魚病名、発生月、養殖池名、予防、治療法及び被害量などについてまとめた(表)。

ウナギの病気としてペコ病、キホウ病、エラグサレ病、ヒレアカ病、ワタカムリ病、及びイカリムシ病など、コイに水生菌病、エラグサレ病、ウオジラミ病、鰓への石灰沈着及び立鱗病(マツカサ病)など、ソウレンギョにヒレグサレ病、海水観賞魚に白点病が発生し、被害もかなり多い。

### 考察と今後の問題点

県下の養殖がいずれも着業早々で、養殖池が新しいにもかかわらず、魚病が多発し、ほとんどの池で少なからず被害をこうむっている。それに養殖管理が十分でなく、魚病対策の認識が薄く、そのうえ、魚病の適切な処置判断が出せない事にある。すなわち、養殖池は養殖魚が住み良い環境に保ち、池水の交換、ウナギの水づくり、残餌の処理及び有機腐敗物の除去などに気を配る必要がある。魚病の予防対策としては、常時及び定期的な観察を行ない、魚病発生の早期発見に努めなければならない。魚病が発生した場合には、その原因を究明し、適切な投薬処置を行ない、病魚及び斃死魚の除去を行ない、他の魚への感染を最少限に押えるようにしなければならない。

今回の調査結果では池水の悪化、有機腐敗物、病魚及び斃死魚の除去などが十分でなく、病気の伝染を助長し、蔓延させたのが2、3みられた。また、魚病に対する適切な処置判断がわからず、被害をこうむった業者が多かった。その点、沖縄養殖センター(今帰仁村字運天)の養鰻場は、飼育管理がよくなされており、3ヶ月に1回の割で池底を干出させ、日光及び石灰散布消毒などを行ない、魚病の予防対策に努めたため、被害がほとんど無かった。

魚病発生原因の一因として、導入時の種苗や原料にすでに病気にかかっているものが混入したため、それが養成中他に感染し、被害をこうむることもある。ウナギのペコ病、コイの立鱗病、エラグサレ



魚病発生状況一覧表（1970年5～10月）

月	魚病名	予防及び治療法	養殖池	備考
ウナギ				
5～9	ベコ病	病魚除去	大宜味村字田港（新城）	10～100g/尾 約5万尾斃死
8	キホウ病	池水交換	琉球水産試験場	
8～10	エラグサレ病	サルファ剤経口投与	与根冷凍（那覇市首里石嶺） 屋我地村字屋我地（長嶺）	30～50g/尾に多い、与根冷凍は蓄養池、ヒレアカ病併発
8～9	ヒレアカ病	サルファ剤経口投与	与根冷凍 南西養魚 読谷村字比謝川（新垣）	南西養魚 2～3kg、比謝川約1kg斃死
9	鼻上げ	水づくり、飼育管理	屋我地村字屋我地（長嶺）	80～100g/尾約2.5トン斃死、有機腐敗物多い。
コイ				
5	水生菌病	定期的検卵、マラカイトグリーン	国吉農園（糸満町字大里）	2～3万のコイ卵が致死
5	エラグサレ病	食塩水、過酸化水素水水浴	国吉農園（糸満町字大里）	水面に腐敗物多く、雑コイが数千尾斃死
6～7	ウオジラミ病	ネグボン、BHC、DEP 池水散布	糸満農水産研究所	20～25日に1回の割合で2～3回投薬
7	石灰沈着（鰓）	池水交換	浦添市宇勢理客（宮城）	アク抜きしていない貯水タンク使用が原因
ソウレンギョ				
10	ヒレグサレ病	硫酸銅水浴	北中城村（宮城）	2～3千尾のソウレンギョが斃死
海水観賞魚（ツノダシ、チョウチンウオ、クマノミ類）				
10	白点病	硫酸銅、ネグボン投薬	与那原町	淡水魚の白点病とは、病原菌及び治療法も異なる
ウナギにワタカムリ病、イカリムジ病、輸入コイに立鱗病が発生				